
占夢者の夢 壱ノ巻

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢 壱ノ巻

【Nコード】

N4423D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

現代の占夢者^{ゆめとき}である都往朔夜。そしてその居候で、陰陽師の塚原叶。この二人が解決する事件とは？夢と悪霊が絡み合うちょっと不思議な小説です。

#1 プロローグ

プロローグ

人が見る夢には二通りのモノが有る。

それは、自らの希望として現実で見る夢。

そして、もう一つは、睡眠という名の元に潜在的、且つ無意識に見る夢。

それは、言葉を同じくはしているが、必ず意味の有るものであると考えられている。

そしてこの話は、後者の睡眠中に見る夢を追い求める者達に捧げる一つの例に過ぎない。

過去、この世界に夢について語り継がれて来た説話や、記録が多く記録されている。

エジプト、中国、ヨーロッパ、インディオ。そしてその他の国々そう、各地で多くの者達の手によって、この夢の研究がなされて来たのだ。

その一説、あの有名なフロイトや、ユング博士達も有名な著書をかかげて、己の考える説を上げ連ねている。

そんな中、例外なくこの日本でも、古代、平安と、夢を神の言葉を聞くための手段の一つとして寺社に参詣するなどして、流行して来た。

その例は、過去多数上げられている。

夢占いで得る情報はこの現実の世界に深く関与し、それが人々の心に強く根付いていたのだ。

そこで、貴人にならって夢を見る夢見法師という呪術者や、はたまた、説話に登場する占夢者という占師が現れたのであった。

また、夢を交換する事が可能であると考えられ、他人にならって夢を見、夢を売買するなどと言う事が行われたと言う。

これは、この現代でも夢占い師そして、裏家業、占夢者として生涯生きて行く青年と、それを補佐する仲間達の話である。

#1 プロローグ（後書き）

シリーズ長くなりますが、最期までお付き合い頂けると嬉しく思います。

#2 この想いが届くなら・・・

この憶いが届くなら……

麗らかな春の落ち着いた日射しがこの2DKのアパートの一階の窓越しに差し込んでいる中、一人の青年はもう必要でも無いであろう、こたつから一向に離れる様子を見せない。

その様子を、乱雑なキッチンの椅子に腰掛けながらもう一人の青年は、テーブルに片肘を付きながら呆れ顔をもたげて眺めている。

そんなその青年は時折、左手にはめている時計を気にしながら、

「お前よく飽きへんなあ？」

つい堪え切れずに言葉に出してみる。

「何がです？」

平然と、今取り組んでいる事に終止符を打とうとしない、こたつの中の青年。

「何がって……一日中そんなノートパソコンに向かってメールの確認やら、はたまた手紙を読んでる事や！」

今一度、テーブル下の膝を組み直して問いかける。

「ええ。飽きませんよ。楽しいですし、それにこれも一つのお仕事ですから」

云いながらも、熱心にパソコンに向かっていている青年。名前を都往朔夜（25）という。

一見、のんびりとして、人懐っこい容貌に、小奇麗に切りそろえられた短い黒髪の青年。

しかし、その話口調は、のんびりしている。

「そうですか、そら良うございましたね。俺はそろそろバイトの時間や。出かけるから、ほな！」

云いつつぶつくさ……

「あー。かえでちゃんまだやし、今日はついてへんわ……」

頭をもたげ仕方ないと、キッチンの椅子から重い腰をあげるこの青年。名前を塚原叶（24）

こたつの住人とは全くキャラクターの違う、女好きされそうな茶髪の青年。

どう見積もっても、この二人の共通点なんて見つけれそうも無いように想える。

「今日は、何時頃戻るんだい？遅くなるようだったら、困るだろう？ちゃんと忘れずに鍵を持って行っておいた方が良い。僕は、一度眠ったら起きる事は皆無ですからね」

マウスでクリックする動作を止めることもしないで、のんびりとした口調でそう云い残す朔夜。

「そんなん分かりとるわ！過去にあんな痛い目におおとるからな！」

それは、寒い寒い冬の出来事。

夜中のバイトが終わり帰って見たら、鍵を忘れている事に気付いた。そこで、中にいるであろう朔夜に開けてもらおうと呼び鈴を何度も鳴らしその上、携帯で電話を掛けて呼び起こそうとまでもしたが、結局応答無し。

仕方なく行く当ても無い叶は、持ち合わせのお金も無く近くのコンビニで徹夜を決め込んだのである。

もう、二度とあんな酷い思いはしたくは無い。

今でもあの時の事を思い出すと、一発殴らなくては気が済まない気持ちであった。

「こんにちわー！」

怒りを表に出そうとしたその時、狭い玄関のドアが開く。勝手知ったる家に入って来るかのように両脇に小包を抱えた一人の少女：基い、一見童顔の為かそう見えてしまう一人の女性が上り込んで来た。

その姿を見るや否や、今までの怒りをすっかり忘れてしまったかの叶。

そう、その女性の名前は佐藤かえで（２８）

「かえでちゃん！」

一目散にかえでに駆け寄り、飛びつこうと云わんばかりである。

しかし、その行動をすでに見切っているかえでは、慣れたかのようにヒラリと上手く交わす。

そして、スタスタと奥の間の、朔夜の上に足を運んでいった。

「朔夜ちゃん、またファンレター届いてたわよ！さすが、今人気絶好調の夢占い師だけの事は有るわね！しかし、数多くの大学の教授から、講演を開いて欲しいとの要望も有るって云うのに……いい加減、こんな所から引越したら？熱狂的なファンが見たら嘆くわよ！？」

六畳の畳の部屋には、ぎっしり積まれた本の山に、手紙の山。はたまた、段ボールの開かれていない山がこの部屋をいつそう狭く感じさせている。

それはまるで、売れない作家の部屋のような。

「その上、こんなお荷物までしょってたら、大変じゃないー！」

部屋を見渡した後、叶に向かって素っ気無く指をさす。

「かえでちゃんー！ん。そりゃないわあ」

かえでの一言に傷ついたとでも云うかのように胸に手をやり、よろめく叶。

余りにも大袈裟なりアクションなので、かえでは呆れ顔で顔をしかめた。

そう、叶は現時点、朔夜のアパートの居候。中学校時代に、叶が大阪の実家を飛び出してからこの東京で出会い、且つ今まで何の因果か付かず離れずの暮らしを共にして来た仲なのである。

今でもそのなごりか、叶は、朔夜の上に身を寄せている。

「かえでちゃん？引越す気は無いですよ。僕は此処が気に入っているし、それに叶は、お荷物なんかでは無く、れっきとした僕の相棒ですよ」

相変わらず、パソコンの画面を見詰めながらシレッと云って退け

る朔夜であつた。

「こんらあゝ！朔夜！何勝手に俺を相棒なんかにするんや！そんな認めとらへんで！俺は！」

聞き捨てなら無いとばかりに、叶は『ツカツカ』と、朔夜のもとに足を運ぶ。

そんな叶の事など気にも止めないで、こたつの上に有る、みかん籠からみかんを取り上げて皮をむきはじめる朔夜。

「まるで、小間使いのようにお前の仕事を手伝わせといて……一体俺のバイトどんだけ変えさせたら気が済むんや！」

こたつのテーブルを一発叩く叶。何だか締め出しを食らった時の事まで思い出して相乗効果。

その音が狭い部屋に響く。

「でも、ちゃんと、叶には報酬を払ってあげているでしょう？バイト料より弾んでいるはずですが……気に入らないのでしょうか？」
やっと、叶の方を見上げる朔夜。その顔はにこやかな笑みを携えていた。

ムキになった叶であつたが、この微笑みには勝てるはずも無くてお茶を濁す感じで、顔を背ける。

そんな中、かえでは朔夜の手許に持ってきた小包を解き中の手紙を置く。

その中の一通の手紙の封を切りながら、朔夜は叶の出方を見守っていた。

「……気に入らないつちゅう訳や無いんやけど……ただなんちゅうか……」

叶は、言葉を詰まらせて、しきりに自分の中で思い巡らせている事をそのまま置き換えられる、正しき言葉を選び出そうと懸命になっていた。

何かを思い描くかのように、視線を斜め上に泳がせる。

「……そう、なんちゅうか……」

ただひたすら孝え込んでいる叶。全くらしくない事をしている。

そんなことをしている内に、バイトに間に合わせられるか？そんな時を刻む時計の針の音。

そんな時、朔夜は二通目の手紙を取り上げると中に書かれている文字を読み始めた。

しかし『ジッ』と眺めていた手紙の文面から目を離れた朔夜は、

「これは…」

言葉を漏らした。

「？」

今まで思い巡らせていた叶の頭は朔夜の声に反応し、そしてかえどと共に 視線を朔夜の方へと向ける。

「どうやら、叶。お仕事のようですよ」

『ニマリンコ』と、満面の笑みを浮かべて、爽やかに微笑む朔夜の様子に、うんざりな叶。

さてさて、今度の仕事は一体何でありましょうか？

「拝啓 都住朔夜様

初めてペンを取らせて頂きます。

私の名前は八亀佳代と申します。

都住様が裏家業占夢者である事を承知の上、実は折りいつた御相談を兼ねこの手紙を書いております。

この二週間ばかり、私の見る夢が全て同じものであるという不可解な現象に悩まされている。という事から語らせていただきます。

これは一体どういう事を意味しているのでしょうか？

何かの暗示？

それとも、警告なのでしょうか？

その理由を解き明かして頂きたいのです。

まず、その夢に出て来る人物の事を語らせていただきます。

去る、一ヶ月ばかり前、私の婚約者、前園克が、結婚式を次の日に控えた矢先、不慮の事故で永眠しました。

彼は純朴で仕事熱心な、明るく優しい青年でした。

そんな彼との結婚は、一年も前からゆっくりと時間をかけて話を進めており、私達の中で、早く一緒に過ごせる日々を夢に見ていました。

しかし、彼が亡くなる前夜。私、がいつものように電話で彼と話している際、ちょっとした言葉のあやが原因で、喧嘩をしてしまったのです。

今想えば、何であんな事くらいで……と心に痛く響くのですが、そんな自分と、もうこの世にはいない彼との溝は結局埋まらなかったのです。

そう。私は一言、謝りたかった。

色んな意味を込めて、彼の死がこんなに自分に衝撃をもたらすなんて……

毎夜、夢に出て来る彼。

彼は何も私に語りかけてはくれない。

いえ、何かを語っているのに私には届かないと言った方が適切なのかも知れません。

そんな彼の前で、私は、一言謝ろうと努力をしているのですが、私の言葉は一向に彼の耳には届いてはいないかのように、時は流れて行くのです。

全身全霊をもって、彼に私の気持を伝えようと、もがく事もあります。しかし、想いは届かない……

そんな夢をみるのです。

このような夢を見始めてからと言うものの、私の周りでは色んなトラブルが立て続けに起こり始めています。

御願いです夢占い師、いえ、裏家業として占夢者をされていると噂される、都住様。どうかこの醒めない夢を……彼に謝って、自然体でいられる夢にして頂きたいのです。

詳しくは、一度お会いしてからで宜しいでしょうか？

もちろん、報酬の方も考えさせて頂いております。

連絡先は……」

朔夜を取り囲んでこの内容の手紙を読み終える叶と、かえで。

「何や。別に俺の出る幕なんか無いやん」

云いながら立ち上がる叶。拍子抜けだとばかりに、一気に肩の力を抜く。

「そんな事は無いですよ。これは明らかに、霊の力が絡んでいる。

叶？君の 陰陽師としての力を借りたい。是非、この僕に力を貸して欲しい」

仕事の話になる時の、一見は穏やかであるがその実、一番熱くなる朔夜の静かなる微笑が叶に伝わった。

「やけど、夢の事は範疇やないで。俺！分かつとるやろお前も！何処に霊がひそんどるっちゅうんや！？霊がこんな夢見させとる……とでも言うんか？」

結局、バイトの時間に間に合わない知り、真直ぐな朔夜の目を戸惑い退けながら開き直ったかのごとく、叶は朔夜の横に腰を下ろした。

「実、単なる夢占いでは、死人が出て来る夢は古来より死と再生を意味するんだ。つまりどちらかに転ぶとこれはとんでもない事になつてしまうと言う暗示なんです。彼。前園さんが、現れた。つまり、披女、八亀さんに対して、新しい道を歩むように示唆していると考えることも出来る。しかし、問題は、死者と話が出来ないことにある。このことは、幸運を招く事にはならない」

一瞬押し黙るかのように日蓋を閉じた。

「何かが、前園はんと、八亀はんを妨害しているっちゅうんやな？その何かを霊やと朔夜は考えてる訳か？」

叶の中で一つ引っ掛かる言葉。

『トラブル』

その四文字を思い出したからこそ、今云っていた朔夜の無言の言葉。葉を叶は察した。

「この夢は、婚約者だった八亀さんに対する危機を告げるものに違いない。もし、夢違いとして処理しようものなら、大変な事になってしまう…」

朔夜は再び瞼を開けた。

「事は急いだ方が良い。叶？その言葉は同意と取って良いんですね？」

朔夜の視線に気付き、叶は仕方ないなと頬の筋肉を緩めた。

「かえでちゃん、申し訳ないのですが、そこにある、僕の携帯取って頂けますか？」

朔夜が指し示すとかえでは、戸棚の上で充電中のワインレッドの携帯を取ろうと、かえでは立ち上がった。

「はい」

素直に云われるまま行動を起こしたかえではあったが、手渡す時、微妙に手が止まる。

「？」

「朔夜ちゃん？そろそろ次の雑誌の仕事も入って来てるんだよねえ。早急に片づけてもらわないと……」

携帯を受け取りながら、朔夜は満面の笑みをこぼし、

「はい、かえでちゃん。分かっておりますよ。有能なマネージャーさんだからこうやって安心して僕もこの仕事に従事する事が出来るとちゃんと理解ってますから、御安心を」

今までの緊張感のあった表情とは一変して、ほのぼのとした口調でかえでに微笑みかける。

そして携帯の蓋を開くと、手紙にある連絡先に電話を掛け始める朔夜。

話の結果、二日後、中央線吉祥寺駅のとある喫茶店にてPM1:00に会う事に決まったのであった。

#3 メッセージ

メッセージ

「初めまして、八亀佳代と申します」

ゆっくりと落ち着いた有線の音楽が流れる喫茶店のあるテーブルを挟み、朔夜と叶に相對している女性は軽く頭を下げ、自己紹介をする。

短くカットされた髪の毛は、亡くなった前園克との決別の折なされた行為の果てに有るものだと言われた。

細身で、やつれた感の有る女性。

質音な黒いワンピースが、その姿をより儼かな雰囲気をかもし出していた。

「こちらこそ初めまして。 どうですか？その後……お手紙拝見したのですが、念のため、詳しくお話したいと思います。 その前にこちらの自己紹介をさせて頂きますね。 僕が都住朔夜で、こちらに座っているのが、相棒の塚原叶です」

その言葉に合わせて軽く会釈をする叶。

「相棒と申しますと……この場合助手の方……みたいな方なのでしょうか？」

朔夜と不釣り合いな個性がすぐ横にいるのが意外だなどでも云わんばかりの言葉に、

「助手?!…まあ、そんなところです」

叶は、テーブルの下で自分の足を踏み付けている朔夜の行為に言葉殺して嫌々肯定する羽目にあう。

「そう云えば御注文は？まだされてないのでしょ？」

テーブルの上に何も無い事に気が付き、朔夜は話の前に一息付こうと促した。

「あ、いえ…私の方は先にレモンティーを頼んでおりますから」

控えめにそう答える八亀。

「そうですか、で僕は縁茶を。叶は？」

「俺は、アメリカン」

一先の気持ちの整理をつけるだけの和みの時間を朔夜は設けた。

暫くするとオーダー通りウェイトレスがレモンティー、縁茶、アメリカンを運んで来た。

三人揃って一口口をつける頃、改めて話は始まった。

「ところで、手紙にあった夢の内容からしますと、亡くなった、前園克さん……元婚約者が一週間続けて出てくると云う内容でしたね。中し訳ないのですが、もっと詳しく説明して頂けないでしょうか？夢の中の場所や時間、出て来る時の詳しい内容などあればこちらとしても判りやすいものですから」

回りくどい事は抜き。手っ取り早く内容を知りたいと、率直に聞く朔夜。

「はい。それは昼のような夕方のような……いえ、夜に近い夕方です。西の空に夕日が沈み、東の空が夜へと移り変わる頃。空が虹色に染まっていく頃です」

初めは自身無さそうに話していたが、ハッと思い出したかのように語りはじめる八亀。

「場所は判りますか？」

「灯台の見える海岸線の何処かです。海を前に立っています。あ……切り立った崖の上です。足下を……確か海を覗き込んだ憶えがあります」

目を瞑り、今夢を見ているかのような感覚で思い出している。実際、色の有る夢はそうそう見る事は無い。

夢に色が付いている程、鮮明な事は無いのである。

しかし二週間の間同じ夢を見るとは云え、やはり、どこことなく思い描くのは難しいとでも云うかのようだ。

「その場所に亡き婚約者の前園さんは現れると言う事ですね。では、

現実でのお二人の事をお聞かせ頂きますでしょうか？」

少し、気を効かせるように朔夜は現実の話を持もかけた。

「はい。結婚一ヶ月前は色々大変な時期でした。式についてもめる事が多い中、結婚式前夜、カツとなった私の方が気持ちの煮えない彼についてつい怒りをぶつけてしまったんです。今思えば、何故怒ったりしたんだろう？彼に非は無いの……とさえ思っ始末で……彼の死後勝手な私の我侭だったと反省しています」

事数で亡くなったとの事でやり切れないのであろう。もし、あの時八亀が怒ったりしなければ、また違った運命を辿り、式を無事あげる事が出来たかも知れないのに……

と考える事も有るのだらう。思いもしない感情の流れが引き起こす運命は、誰にも分かる事等出来ないのだから……そんないたたまれない気持ちが出来てきた。

「結婚実際には、マリッジブルーにかかるというケースは多々有るようですよ。余り御自分を責めないで下さいね」

「……」

悪い方に考えないようにする為に、朔夜は言葉を選んでいるのが、隣でただ事の成り行きを見て座っている叶には判った。

いつもそうである。

叶はただ、事の成り行きを見守るだけである。しかし、ただならぬ心配がこのテーブルを挟んで感じていた。

そう。実は叶は吐き気が起きそうで、身を固めるようにして、その場で待機をしていたのである。

今はその事を八亀に気付かれてはならないとそう感じ取っていたから極自然に見守ってはいるが……

「では、お聞きしますが、海岸のその場所で、八亀さんは何をしているのですか？」

朔夜は再び上手く話を夢の方に持つて行く。

「海を見ていました。でも背後に気配を感じ取り振り向くと、披が立っているんです。何かを云いたげに……でも、何かを私に語って

いるのですが、私の耳にはその言葉を聞き取る事が出来なくて……
最後には、必死に何かを伝える彼と、その言葉が届かない自分。パ
ニックは暫く続いて行きます」

八亀は目をギュツと瞑り、耳を塞ぐかのようにして手の平で覆つ
た。

「そうして、気付いた頃、彼は黙り込んで何か考え事をしたかと思
うと、私の前から姿を消すんです。空気に溶けてしまつかのように
……」

パツと目を見開き、朔夜を見る八亀。

この夢がずっと続くのは何か私に伝えたいから？とでも云いたげ
であった。

もし判るのであれば、教えて欲しいと思っているのかも知れない
ことは手にとる程容易だ。

しかし、この夢だけで、何かを伝えられるだけの言葉は見つから
ないのであろう。朔夜は、何かを考えるようにテーブルに肘をつく。
「…それで、その夢を見始めてから体調が悪くなったり、周りの人
との間に溝が出来始め、トラブルが生じたのですね？」

「はい。日に日に体重が減り、会社では普段しないようなミスはす
るわ、友人関係にヒビが入るわ、全く良い事は有りません。体重が
減った事は、彼が亡くなってから食が進まないからかも知れませ
んが。実、泣いて全てを忘れる事で何とか保ってきた所も有りますか
ら……」

蒼白な顔色が黒いワンピースの色に反映して余計に顔色が優れな
く見える。

「八亀さん？僕の目から見ましても、貴方の体調が優れないのは判
ります。睡眠はどのくらいとられてらっしゃいますか？」

「最近はそれでも…少なくとも六時間は最低とってますが……」

ちよつと考えるようにして、答える八亀。

「六時間ですか？その割には、目の下のクマは目立っているよう
ですが…失礼……」

化粧で隠しているのであろうが、隠し切れて無いのが分かった。

それを気づかせようと敢えて云う辺り、朔夜はこの範囲は叶の範疇だと、黙って隣に座っている叶を見て知らせる。

「云って良いのか？」

叶は、朔夜の出番は終わった事知り、一息つくように、アメリカンを飲み干した。

「何でしょうか？」

突然の交代劇に、八亀は分からないとでも云いたげに、叶の顔を見る。

「叶？お前には判っているんだろう？僕にはその力はないからね」

朔夜は冷めない内にと、目の前に有る緑茶の入った湯のみを持ち上げると軽く啜った。

「朔夜？紙とペン持つとるか？」

静かに切り出す叶。そのくらい用意しておけば良いのに、こういうところに依頼心がある叶。

「ええ、持っていますよ」

脇に置いていた鞆から、メモ用紙とボールペンを取り出すと、叶の目の前のテーブルに並べる。

その取り出されたペンを指で軽く摘むようにして、

「えーとな…こんな感じかなあ？」

まるで、幼稚園児の落書きの方がマシな絵を描きはじめる叶。

そのペンタッチを呆れる気も無く見下ろして、

「相変わらず絵の才能ないですね」

笑っている朔夜。

「放つといってくれ！」

笑いにムカついたのか、ガリガリと書きなぐる叶。かなり子供じみている。

そして、思いのたけを書き込んだ所で、

「八亀はん？こんな感じの人物知らへんか？」

絵を差し出して、叶は問いかける。

しかし、そうは云われてもこんな稚拙な絵で判れと云う方が可笑しかった。

「…ええと…」

困った顔の八亀。手を口元に持っていて考え込んでいる。

「困ってらっしゃいますよ。叶？」

今にも吹き出したいとでも云いたげな、朔夜の顔に苛立ちはしたものの、

「そんな事云われてもなあ…絵の才能ないのやけど…それでも一応特徴は掴んどるんやけどなあ…」

焦りながら、言葉を見つけ出していた。

「そうや、なんちゅうか、男なんやけど細身で、左目の下にほくろが有って…」

云われてみれば、そう描きたいと云う意志が見られる絵ではあった。最終的には言葉に頼る叶。なら初めからそうしていれば良いものを

いらない恥をかく叶は、何だか微笑ましい。

「細身で、左目の下にほくろ…」

そんな叶の言葉を受け取り、身近なところで思い出そうとしているかのように八亀は視線を窓の外に流した。

「年の頃は、二十五、六で、背丈は180位やなあ」

思い当たる所を振り返り、八亀は考えていた。そして、

「それはもしかしたら、私の勤めている会社の同じ部署の、三上さんかも知れません」

視線を、叶に定めて、ハッキリと思い当たる旨を伝える。

「そいつとなんやあつたか？」

不躰な質問かも知れないが、叶にはそんな事はどうでも良かったのかも知れない。単刀直入に訊かないと事実が掴めない。

「…おつき合いを迫られた時期がありました。……でも、私には婚的者がいるからお断りしましたが……」

言いづらい事だから…少し心が疼いたのであろう。八亀は目線落

とし気味に答える。

「そうなんや。分かったからその辺でええで。そう云う事なら俺もやりやすいわ」

と、今度は叶が何か思う所が有るかのようにな考え込み始めた。

「あの…三上さんが何か？」

ふとした不安が過つたのであろう、八亀はボソリと問いかけて来る。

「ん？…云うてええんやつたら云わしてもらうんやけど、八亀はん。あんた、その三上つちゅう奴の生霊に取り憑かれとるんや」

「生霊？！」

聞き慣れない言葉に、たじろぐ八亀。

「でも安心しいや。早めにケリは付けてやるさかい。相手も、まだ未練があるよって、少し厄介やけど、今は俺の力の方が上や…やけどこのまま放置しとつたら厄介かも知れんなあ……」

ちよつと、考えるようにして、チラリと朔夜の方に視線を送る。

その様子に気付き、朔夜は肯定のサインを送る。

「どや？明日うちの方に向かわへんか？こういう事は、さっさと片を付けた方がええよって。朔夜の方も許可くれたし、まずはこちらの方が重要やしな」

その言葉に、

「叶がそういうのなら、早めに取りかかりましょう。どうです？明日なのですが、僕の家に来て頂けますでしょうか？出来れば、叶の仕事の後、僕の仕事の方も片付けられると思いますから」

八亀には二人の云いたい事が良く理解できなかった。

そして、このままではいけない事は重々承知している。その上不安な気持ちが高まらないと云えば嘘になる。

だけど、自分はこの人達を信じて今の状況を打開するすべしか思いつかない。

だから、

「明日ですか。仕事、六時には終わると思いますが、その後でも宜

しいでしょうか？」

と切り出した。

「結構ですよ。夢を見るには、夜の方が好都合でしょうからね？」
ニコリと穏やかな笑みを見せる朔夜は、八亀の心を落ち着かせるだけの魅力があった。

「やったら朔夜、住所の分かるもん出さなあかんやろ！」

云われなくても、自然に名刺を渡す朔夜。

その様子に、何や気付いとるんか…と、両白く無さ気の叶。

その二人のコンビネーションの悪さに、戸惑いはあったものの、八亀は、不思議と少し気が安らいでいた。

「こちらの住所までお越し頂けますでしょうか？詳しくは、この名刺の裏に書かれてある地図を見ていただければ幸いです」

名刺の裏に地図が書かれてあるなんて珍しいとは思ったが、確かに解かりにくい場所である。下北沢の、入り組んだんだ住宅地。

「では、明日、お伺い致します。あの…報酬の方は？」

ちよつと躊躇いがちに、八亀は切り出した。

「その話は終わってからで良いですよ」

「そうそう、取りあえず、全てを終わらせん事には話でけへんやろ？今はそんな事考えとらんで、俺らに任せときいな。悪いようにはせえへんから」

こうして、話の段取りを付け、三人は喫茶店を出た。

「それでは、明日お邪魔致します。何とぞ宜しくお願い致します」

深々と頭を下げ、八亀は吉祥寺駅北口のバス乗り場へと足を伸ばして行った。

その後ろ姿を昇送るようにして、朔夜と、叶は立っていたが、叶は忘れないようにと、ポケットから取り出した一枚の紙切れに何やら呪文をかけると、パツと室中に放り投げた。それは、一羽の鳩となり八亀を追うかの様にして大空へと飛び立って行った。

「何です？式神ですか？」

「そうや。何か有った時のためには守護するもんがいるやろ？俺の忠実な部下にその任務を与えてやったんや」

それだけ云うと、ズボンのポケットに手をつ込み、飛び立った鳩を眺めている。

「全ては明日片を付けたるわ…朔夜も、準備怠るなや！」

「云われなくとも分かっていますよ。僕の方は、あの夢の内容が手にとるように理解できましたからね」

にこやかな笑みで答えてる辺り、何を考えているのか判らないといつも思っているので何も言う事は出来ない。

しかし少しくらい怒った朔夜も見てみたい気がするなと思う今日この頃の叶。

そんな時分、路地を行き交う人々の雑踏の中を、二人はこの場所を後にした。

#4 真夜中の異変

真夜中の異変

「それじゃあ、明日のために徹夜する事になりますから、電気点けてますけど、眠れそうになかったら、云って下さい」

朔夜はそう云い残すと、部屋のドアを閉める。

朔夜は、仕事の前の日に必ず睡眠を削除する。それは、次の日のための儀式のようなものでもあることは叶も了解の上であった。こうしないと、朔夜は夢の中に入って、仕事が出来ないからだ。

「ああ、よう判つとるさかい、気にすんなや。俺はいつでも何処でも寝れる体質やからな」

気にする必要はない。叶は慣れっこだとでも云うかのように、ヒラヒラと手を振って気軽に流した。それが叶流の答えである。

しかし、先程から気になる事があった。

何故か虫が知らせて来るのかも知れないが、右の掌が熱くなって来ている。これは、何かの予感かも知れない？

何か起こる前の兆候が今この体に起こっているのを感じながら、自らの部屋に入りベッドに横になった。

そんな中眠れる気がしない。

それが今の叶の心境であった。

人は何故夢を見るのであろう？

それは予知夢の類いなのか？

自らの意思の中に組み込まれる知られざる未知数。

そして、無関心に放っておく事の出来ない重要な知らせ。

でも、叶は夢を見る事は無い。
だから、その感覚は解からない。
たった一つ、自分に欠けているモノ。
それが夢だった。

「！」

突然目の前に、流れる映像。それは叶がベッドに横になってから二時間経った頃の事である。

真っ白い紙が二分割されるかのように引き裂かれた映像が目蓋の裏に焼き付いた。

これが自ら放った式神に何かが起こった事の暗示である事を悟り、叶は休めていた体を一気に緊張させる。

そして、飛び起きると同時に朔夜の部屋に駆け込んだのである。

「朔夜！今直ぐ向かうで！八亀はんの身に何か起こったわ！俺の式神がやられた！」

大きな音を立て、飛び込んだ先に支度を済ませている朔夜の姿を見つけ、

「なんやお前？何しとるんや？」

「分かってますよ……不可思議な印象が頭を過ぎったので……しかし、このまま行つて仕事ができるかどうか……」

光の加減か？青ざめた朔夜の顔。

「調子悪いんか？……もしかして……」

普段だったらここで一発、喝を入れるくらいの勢いで、叶は接する事ができるのであるが、この事態の流れで行くとそういう訳にも行かない。

朔夜にとつて一日の猶予がなければこなす事が出来ない事も有り得る事態でもあったから……

「取り敢えず、タケシー呼ぶさかい、少し休んでろ。ったくこんな

時に……」

ぶつくさ云っているだけましかも知れない？まだ自らの精神に余裕があるのだから。

しかし今になって、あの生き霊の力がレベルアップする等とは想ってもいなかった。計算外の出来事。

「シマツタ！侮っていた！」

と後悔する中、取るべき行動だけは確実にこなして行く。

こたつの上に置かれている、朔夜宛に送られて来た手紙を手にとると、裏面に記載されてある住所だけが頼りであった。

それをポケットに忍ばせると、一目散で自らの携帯から近くのタクシー会社を手配する。

五分後、タクシーは二人を乗せ、吉祥寺へと向かった。

それは夜中の零時過ぎの事であった。

一時間弱の夜間の徘徊。

タクシーの中で、何とか体調を取り戻したのであるが、叶は朔夜の顔に血の気が戻って来ているのを察して一息つく。

「何とか意識の方ははつきりして来ましたよ。迷惑を掛けたみたいで申し訳ないですね」

珍しく躊躇いがちに話し掛ける朔夜。明日は雪でも降るのか？

「別に迷惑なんぞ掛けられとらんわ。それより、八亀はんの方が気掛かりや……俺とした事が、してやられたやなんて……この借りは倍返しやな。朔夜、体調整えとけや。ええな」

真直ぐ前を見てそれだけ云うと、押し黙る叶。

屈辱とでも云うかのような後悔の念が、珍しくも叶の中で渦を巻いている事が、手に取るように分かり、朔夜はそのまま気持ちを察し、何も語らなかった。

そして、いつもと条件の違うこの状況下を、どう打開するかに焦点を向ける。

睡眠の削除。

これをしてしないで、占夢をすると一体どうなるのであろうか？一向に予測が付かない。

経験の無い事をする上の覚悟をしておかなければならない事は、この時点でハッキリと判った。後は、自らの力を出し切るしか法は無い。

無常にも時は過ぎて行く。

不安を拭う間もなく、二人を乗せた一台のタクシーは、夜間運賃のメーターを気にする事無く、無言のまま運んで行った。

そして目的地、八亀の自宅に何事も無く辿り着いた。

表札と、ルームナンバーを確認し、ドアの前に立つ叶と朔夜。

八亀は一人暮らしのアパート住まいであった。

それを良かったと、叶は感じていた。

もし、家族と住んでいたら、こんな時間に何の用だと怒鳴られる事を覚悟しなければならなかったと感じていたから。

こうして一つの問題は解決したのである。

しかし一番の問題は、この部屋にどうやって入るかであった。

現状、部屋に電気が点いてない。それは八亀自身、もう眠りについてしまった事の証である。

しかしこの状況下、いつまでもドアの前に二人で突っ立っている訳にも行かない。そうなると不法侵入する他無いではないか？

分かっているものの、夜中に年頃の女性のお宅に不法侵入する事が躊躇われる……が、そうも云ってられなかった。

「わちゃー！何なんやこの靈気は……こんなに根に持つ生霊は初めてや！根性メチャメチャ悪いやん！」

苛立っていた叶は、八つ当たりのように癪癢を起こす。

ドアの奥から感じられるドロドロとした妖気。さしもの叶はその根性に圧倒されていた。

「くそっ！これやったら俺の式神破ったのも頷けるわ！」

気分悪いとでも云うかのように、吐き捨てる言葉。

「叶？八亀さんの方ほどなんですか？」

朔夜はスルリと叶の横に立ち、静かに事の次第を訊いて来る。

「まだ、取り込まれてはいないわ。それより、このドア開けん事には話にならん。どうするんや、朔夜！」

「管理人呼んで来るつたつて、この時間やし。見ず知らずの訳の分からん男二人が、いきなり乗り込むんも問題やし…手が思い付かん！」

そんな焦っている叶を尻目に、何も言わず朔夜は、アパートの裏へと足を向け始めた。

「おい！何するつもりやねん…て…」

「非常事態でしょう？事が起きてからは仕方有りませんからね」

冷静な表情で微笑むのを見て、密かに敵に廻したくないなと思う叶。

裏に回ると、鉄骨の少し錯が付いた階段がある。

その階段を使って、二階の窓に朔夜は一筋のメスを入れた。

「こんなもん何処から持ってきたんや！」

どう考えても、泥棒が使う手口であると思われる、道具。しかも旧式。スツと円形に線をひいている。

「何かのために、コレクションしてたんですよ」

あっさりと云って退ける辺り、犯罪者の匂いが漂って来そうだとも想われたが、叶はあえて口には出さなかった。

暫くするパカッと開いたガラスから朔夜は手を潜ませると、内側の鍵を開ける。そしてガラス戸を周りに悟られないように、音をたてないように、

引くと静かに侵入する事が出来た。

中は真っ暗で何も見えない状態であったが、奥の方で呻き声が聴こえて来るのに気付き、二人は足早にその方へと向かう。

廊下を出た右に位置する部屋。

そこから、苦しそうな声が聞こえて来る。

ガラリと開けたその部屋に、無数に飛び交う禍々しい青白い光の渦。

「なんてこった！」

叶は、脳の中を素手で鷲掴みにされる気分でその靈魂を見上げた。部屋に、生き靈の姿がクッキリと浮かび上がり、眠っている八亀の身体を押さえ付けるように浮かばせていた。

そして何処からとも無く引き連れて来たのであろう、低級靈までもが浮遊していた。

「どういった状況なんですか？」

こんな状況で靈感のない朔夜に冷静になってもらっても困ると察して、

「悠長に云ってられるもんやないんや！今直ぐ取りかかる！」

楔もまともに出来てないが、これ以上の猶予はなく、八亀の精神に異常が出る前に靈を払わなければならない。

一気に印を結びはじめた。部屋の構造も何も把握できてないが、方角だけを頼りに事を進めた。

「靈界の分子よ、我の元に集え！我ここに有らん！」

叶は言靈の力を借りて、辺りの迷える靈魂を引き寄せる。すると八亀に引き寄せられていた靈達は一気に叶の方へと流れ始めた。

眩しい光が叶の周りに纏わりついて来る。

「今や！朔夜！こいつらの事は俺に任せとけ！少しでも足止めしとるさけ、お前は八亀はんの夢の方を何とかしいや！」

朔夜にはこの状況の事は一切目に見えてはいなかった。

しかし、自分のすべき事は見えている。

「後は任せましたよ！」

すると、大きくすうつと息を吸い込み吐き出すと、心を解放するかのように、気を抜く。

いつもと同じ仕事の感覚が蘇り、緊張も半ば、立ちのいて行く意識。

この調子なら、上手くいく！
崩れ落ちる朔夜の身体。そして、次第に意識は体を離れ現実から
遠退いて行くのであった。

#5 真つ白な風景

真つ白な風景

さざ波の音が聴こえて来る。

朔夜は意識を開放し、体から抜け出るかのようにして、八亀の夢の世界に入り込んだ。

いつもなら、徹夜しての行為なので何だか慣れない感覚ではあったが、真つ白な風景の一角に入り込む事が出来た。

目をこらしてみると、細長いコンクリートで出来た建物が目に飛び込んで来た。

それが灯台である事は慣れて来た目をこらした時ハッキリと目に焼き付いたのである。

暫くすると、この風景が濃く鮮明に浮かび上がってきた。そして、色が滲み出して来たのである。

空は七色に変化する時刻。

確かにこれが八亀の夢の中である事は、ハッキリと自覚できた。

『失敗はしていないようですね』

無意識界で意識を保ちつつ、八亀の登場を待つ。

まだ八亀はこの場所にはいないようである。

霊の妨害を受けているためか、混沌としたこの無意識界に入り切れてないのかも知れない。

無意識界での動きが取れ始めて、朔夜の意識は順調に制御でき始めていた。

後はこの場所に現れる、八亀を持つばかりであった。

そんな時、透明な室気の中から、一人の女性が浮かび上がって来たのである。

それが判り始めた頃、夕日が水平線に消えようとしていた。

『叶、やりましたね。取り敢えず、生霊の方は片が付いたと言う所

でしょう』

一息つく朔夜。

そんな時、西の空に思いを馳せていた八亀の体の背後に、もう一つの影が浮かび上がった。

朔夜は遠目で見ている訳にも行かず、八亀が隣に来るまで近づいてみる。

二人に気付かれないように…

すぐ後ろの気配に気付き振り返る八亀。しかし、もう一人の人影の言葉は届いていないらしい。

『このままではいけませんね』

そう、届かない前園の言葉。

このままでは、始まりも終わりもないエンドレスな悪夢。

『神聖賢強、夢売買致します。まずは…』

大きな意識を室気に溶け込めます感じて朔夜は辺りをなぎ払った。

一新して、崖の有るこの場所から周りが昼間の草原に変わった。

青々と息づく草は、地平線の彼方まで続くかとも思える雄大な大地に根付く。

その中に前園と八亀は立っていた。

『そして…』

この夢の世界を覆うような朔夜の意識体は黄金色の息を吹き掛けるように風を起こす。

暫くすると音が周りに広がって行く。

風に擦れる草の音が心地よい。

そして…

「克…さん」

言葉がクツキリと辺りに広がって行く。

「どうすれば許してくれるの？私はただあなたに謝りたいだけなの…」

泣きながら八亀は問いかける。

「どうしたんだい？君らしくないじゃないか？佳代。俺は、君のい

つもの笑顔が見たいな」

「！」

今まで一度たりとも聴こえてこなかった前園の言葉が聴き取れる。
『これで一安心ですね。それでは僕はお邪魔ですから…』

そんな事を朔夜は孝えていた。

しかし、普段ならここで、夢から離脱出来るのであるが、どうやらそういう訳には行かなさそうである。意識を解載から収縮するのに、無理が有る事に気が付いたから…

このまま、八亀の夢が終わるまでこの場所を離れる事が出来なくなつたのである。

「克さん…でも私、これからどうすれば良いの？貴方がいない世界に独り取り残されてしまった私には、この先生きる勇気もない…」

前園を前に弱気の八亀。

それは、云いたい事の一つも云えないでいるようだった。

「僕はね、君の幸せを願っているんだよ。さあ、勇気を出して、笑つてごらん。そうすれば、僕は安心して眠る事ができるのだから」

前園は、静かに両腕を差し伸べる。そして、八亀の肩を優しく抱き寄せた。

「僕はね、後悔しないとは云い切れない。佳代をはじめ残して来たものがたくさん有るのだから。返って許して欲しいと想う事ばかりだ」

優しい言葉。

「本当はね。克さんに謝りたかった。私、我が儘だったの。ごめんなさい…こうして貴方とお話ができるのを楽しみにしていたの。一言、ごめんなさいと謝りたかった。これは私なりのけじめ。これからは、どんな時にももっと人を想い遣る事ができるような女になるわ。だから、私の事を見守っていてね。約束よ！」

二人の重なったシルエツトが一面の草原の中で一つのアクセントとしてスウツと消えて行った。

その様子を見て、朔夜は揺れる画面を見ていたかのように一瞬考

えを素に戻したが、消え行く残像を持って、意識はこの場所を離れて行った。

『良かったですね。八亀さん』

そうして、朔夜の意識は現実の世界に舞い戻って行ったのである。

#6 ゼロからのスタート

ゼロからのスタート

朔夜の意識が身体に戻ってきたのは、もう夜が明けるであろう頃であつた。

夢の中の時間の流れは不規則だ。しかも、無意識界の時間と、意識界の時間が混ざると、その時間は膨大になる。

そんな中まだ覚醒し切れぬ身体を立ち上げハツと息を飲んだ。

「お疲れ様でした。どうもありがとう」

にこやかな八亀の顔が倒れ込んでいた朔夜の目の前にあつたからである。

「占夢は効いたようですね。もう、夢に苦しむ事はなくなるでしょう」

朔夜の身体を支え起こすように、叶は側に控えている。その叶に、

「叶？生霊の方は無事片が付いたようですね？」

「当たり前やん。俺を誰やと想つとる？こんな事朝飯前やつて」

一度は、焦っていたのにこの始末。

記憶に無いのかこの男は？とも想えるほど、叶にイキイキしていた。

しかしここで、お腹を鳴らす叶。その様子にクククと朔夜は笑っている。

「あの…お礼に、お食事して行きませんか？大したもののは出来ませんが、心ばかりのお礼ですから」

八亀は二人の顔を見渡し微笑みながら申し出る。

「良いんでつか？ならお言葉に甘えまして…」

叶の言葉に二人は一瞬呆れ顔になつたが、爆笑する。

「何や？何が可笑しいねん！」

膨れっ面の顔にあどけない性格がにじみ出ている。それが可笑し

かったのだ。

「叶、君は本当に面白いですね」

朔夜は支えられている身体を起こしながら答える。

もう大丈夫だとも言うかのように…

「報酬は、どうしましょう？一応用意させて頂いたのですが…このくらいで宜しいでしょうか？」

軽い食事の後、帰る真際、玄関の所で封筒を渡す八亀。しかし、その封筒の中を見て、

「この分とこの分はお返し致します」

朔夜は封筒の中身を一部引き抜いた。

「不法侵入の際、ガラスを破損させてしまいました。そして、十分な施しが出来なかったものでこちらもお返し致します」

そして、封筒の中は初めの半分に変化する。

「タクシー代と、生き霊払いの分だけ頂きます」

「でも……」

渋っている八亀に、

「朔夜がそう云つとるんや。何も気にする事無いわ。受け取ったときい」

叶は朝飯を食えたと、さも満足気に後押しする。

「では、これで失礼します。また何か起こったらお気軽にご連絡下さい」

そうして二人は八亀宅を後にしたのである。

「ほんま、がめつないな…商売やろ？」

帰りの井の頭線の電車の中で本音を持ちかける叶。

「商売ではありませんよ。仕事とは名ばかり。飽くまでボランティア活動ですから。報酬は、叶のために貰っているんですから、もう良いでしょう？」

いつもそうである。

報酬は自分のものをもらわない主義を一貫としていている姿は凄いが、叶的には面白くなかった。

慈善事業でこの仕事が成り立つはず等ない。

いつも口を酸っぱくして云っている叶ではあるが、跳ね返ってこない言葉のやり取りだからこれ以上云っても無駄だと理解する。

「それに、私の本職は夢占い師なのですからね？」

雑誌連載の方を本業としている事を改めて言う辺り、叶は頭が上がない。

確かに地に足が着いてないような仕事ではあるが、叶よりはマシである。

いつまでもバイトして仕事に従事できない自分。定職に付かないでいる辺り問題だとはつきり感じ始めていた。

「陰陽師の仕事なら、心強いんだけどなあ」

しかし、それだけでは食っていけない。

その事を分かっているから、未だにバイトをしている。

でも、いい年だし、もうそろそろ身を固めるのも正しい選択なのかも知れないと少しづつ見解を広めていた。

「なあ、朔夜？お前はここのままこんな調子で生きて行くんか？」

未だ分らない先の未来。

不安はある。

叶はそれを考えていた。気儘な生活は気分が良い。

しかし、生活力のない今、どうすれば良いか考えてる。

「なあ、いつその仕事を本業にせえへんか？会社として成り立たせるんや。どや？」

恐る恐る訊きたかった事を口に出してみると、

「会社にするつもりはありませんよ。それだけリスクは増えてしまいまからね。それに、僕にその器量はありませんから」

一方的に撥ね付けられる。訊くだけ野暮であった。

「叶は、何をそんなに急いでるんですか？急ぐ必要性はありません

よ。この僕の目の届く所に居てくれたらそれで良いんですから」

またこれだ。陰陽師として利用できる所だけ使う。

それが、計算高いって云うんだと心で思っているのだが、口には決して出せない。

ずっと居候をさせて頂いているのだからと、内心複雑なのであった。

「分かったわ。それなら、またバイトするわ……」
心に刻む。

結局因縁から離れられるものではないのだと判っているのだから。
「帰ったら、かえでちゃんからお仕事依頼が待ってます。叶も、早く新しいバイト探してくださいね」

人事のように軽く云われると人の気も知らんとと、悪態つきたくなるが、これ以上云っても無意味だと自覚している。

「次はどんなバイトにしよう……」

情けなくもボソリと口に出す。

また今日一日が始まっていた。

気持ちの良い春の日射しが差し込む早朝。こうして二人は各駅停車の電車に揺られながら、下北沢の駅へと眠りそうになる意識を保ちながら向かっていたのであった。

#6 ゼロからのスタート（後書き）

この続きは、番外編となります。

またのお付き合ひ宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423d/>

占夢者人の夢 壱ノ巻

2010年10月8日15時58分発行